

## 大学図書館司書の現場と研究の場を往復して

Two Positions : the University Library Librarian and Graduate Student

福井 京子†

FUKUI Keiko†

私事で恐縮だが、以前、愚息が就職氷河期に就職がなかなか決まらず、親としてもどう言葉をかけて良いか分からず、気詰まりな空気が帰省した時も漂っていた。突然、彼の口が開いた。

「なんで、図書館司書になったん？」

「え？」急な質問に答えられなかった。そうか、大変な重圧がのしかかっているのだなど。これは真剣に答えないといけない。私の脳裏をあるものが走った。

「私、図書館司書を天職と思っているの。」

「えー！ そうなん！ 天職？ ほんまに？ ほんまに？」

その後、しばらく沈黙が続いた。

「そうなんや。天職につけたんや。ほんまに幸せな人やな！」と彼が感慨深げに呟いた。

私が天職という言葉を使おうと思ったのは、教育社会学者、歴史学者、竹内洋先生が「福井さんにとって、司書は天職であると思う。天職に出会える人間はめったにいない。」と書いてくださったからである（拙著『いま求められる図書館員—京都大学教育学部図書室の35年—』所収 竹内洋「達人司書」岩田書店2012年）。

私が務めた学部図書室（1998年から教育学研究科・教育学部図書室と名称が変更された）というものの説明を少ししておきたい。

京都大学教育学研究科・教育学部図書室は、旧国立大学などがもつ学部図書室の一つで一大学が附属図書館以外に、研究科、学部、研究所、研究室単位で図書室をもつ形態の一つである。全国にある大学院大学、四年制大学、短期大学の中では、ある意味、特殊な図書室と言っているかもしれない。

わずか15メートル先に附属図書館があり、蔵書も重複しているものもあるがそれでも、教育学研究科・教育学部図書室は厳としてあった。

学部図書室の存在意義は何か。教育学研究科・教育学部の構成員に対して教育的役割を果たすことである。

第一に学部生にとっての存在意義である。日常的に学部生たちの勉学を支援するのはもとより卒業論文を書く学部生にとって重要な存在である。というのは、京都大学教育学部は卒業論文が必修であり、なまかななものでは許されない。それは大学院入試の重要な要素ともなる。

その卒業論文の文献収集において専門図書館としての任務があり、利用指導など論文指導の一端を担う役割も負う。学部生は、図書館司書と資料などをめぐって話し合うことで、論文構想をたてることもある。とくに大学全体が忙しくなってきた、教員たちの目が届かない学部生が増えてきた中では、この役割の比重が増してきた。

私は、1992年から2009年まで、閲覧部門を担当してきた。その間さまざまな利用者と接してき

---

†元京都大学教育学研究科・教育学部図書室

元佛教大学図書館

た。その一部を紹介する。

ある時「アジアの国の教育制度について」という、レポート作成の課題をもって来室してきた教育学部の学部生がいた。本人はこの課題には、興味がなさそうで、適当に早く書けばいいと思っているようだ。京都大学にある資料だけで書きたいと言う。面倒だという雰囲気が漂っている。附属図書館に行ったが、もう少しきちんとテーマを考えてから、来てくださいと言われたので、教育学部の図書室に来たとも言った。

彼は「アジアのどこかの国の識字率を調べたい」と言う。その理由は？という顔を私がしたのだろう。続けて「子どもたちが勉強するということは、まず教科書を読んだり、教師が板書したことを理解するには、字が読めることが大切だと考えたからです。日本みたいに、板書があるかは、知らないけれど・・・」と。すかさず、私は、「なかなか面白い観点からのレポートになりそうですね」と言った。彼の様子少し真剣になってきた。

「まず『Statistical Yearbook』を探します。OPAC（現在はKULINE）であなたが関心のある国名と『Statistical Yearbook』を入力して検索してみてください。ただ、うまく識字率がでてくるとは限りません。日本の場合は、文部省が出していた統計書「壮丁教育調査概況」により昭和17年までの識字率のデータはありますが、それ以降は就学率で統計をとっています。」などと調べ方を教えて、なるべく、自分で調べられるようになってもらうようにした。

「始めは、有り合わせの資料で適当に、間に合わせて書こうと思っていたのですが・・・。京大は確かに資料を持っていますね。福井さん、中国、タイなども考えましたが、フィリピンにします。1979年から継続して資料もあるし、興味もわいてきましたから。」と感心しながら、どんどん、調べ

るのが面白くなってきたようにみえた。

学部生が自分の大学に資料があると感じてくれたら、これからも図書館を利用してくれる。大学図書館司書としては、本当にうれしいことである。

「さらに、もうひとつ調べましょう。Asian Development Bank が刊行している『Key Indicators of Developing Asian and Pacific Countries』にもほしいデータがあるかもしれません。」彼の真剣味も増してきた。「もうひとつ言っていますか。World Bank が刊行している『World Development Indicators』にもデータが掲載されているのではないかと思います」と付け加えた。

彼がそれぞれの所蔵を調べ終えて、所蔵している学部・研究センター図書室へ行こうとしたのを見て、急いで「データが揃ったら、次に教育制度の調べ方ですが、まず、フィリピンの教育関係省がホームページを公開しているか調べてください。日本語の資料は断片的であなたの欲しいものがうまく手に入るか分かりませんが、古いところでは、国立教育研究所の報告書、最近国立教育政策研究所という名称になっているので、その資料も。文部省の『教育調査』、同じく文部科学省から継続して出ている『教育指標の国際比較』『世界の統計』『世界子供白書』、二宮皓著『世界の学校』というものもあります。S先生の授業ですね？学文社から出ている『現代アジアの教育計画 上・下』を見ておいた方がいいでしょう。玉川大学出版部から出ている『アジアの高等教育』も役に立つかもしれません。」と早口で言ってしまった。

でも、彼は、ノートの裏にきちんと書きとめてくれているのを見たとき、本当にうれしく思った。このレポート作成訪問以来、彼はよく教育学部の図書室を利用するようになった。そして、卒業論文の作成時には、資料収集の腕前は見事なものになっていた。このようなことは、本当に図書館司

書冥利につけるのである。

第二に教員にとっての存在意義である。教員に対しては当然、研究の資料提供が大きな役割をもつ。資料収集等のお手伝いをするためにはそれぞれの分野（教育学全般の多岐に亘っている）への一定の専門知識が必要となってくる。教員に対するレファレンス事例は膨大で複雑なため、とても再現できないが様々な難しい質問に答えてきた。だが、それは私一人の力ではない。先生との対話の中で生み出されてきたのである。

例えば次のようなことがあった。旧制高等学校の生活実態（学生数、生活費、学習時間、読んだ本など）の資料調査を依頼され、それを先生にお届けするとき、資料の入手方法、内容などについてお話しする。すると、先生が「そうだ、現代と比べるとどうなるか」などの発想を提示される。そこでさらに、現代の学生の生活実態が載った資料を探すことになる。それをお届けすると次は、また先生の新しい発想の調査依頼がくるのである。

このように資料を求められたとき、この先生なら、どのような使い方をされるかを考えた上でその要求に合う資料も探した。

これは、もちろん、先生以外の利用者にも適用される。こうした過程で私も図書館員として成長していった。利用者、教員との対話がレファレンスには必要である。もちろん、教員については教員の研究動向を、常に調査し、最近の研究を頭にいれておくことを心掛けた。

第三に卒業生にとっての存在意義である。教育学研究科・教育学部の卒業生は卒業後、全国の大学の教員、あるいは教育・研究機関に就職している人が多く、彼らに資料を提供するという図書貸出サービスがある。これは、京都大学の他の研究科・学部・研究室図書室ではほとんど行われていない。さらに、利用相談も担っていた。

図書室のドアが開き、かなり忙しそうに卒業生であり他大学教授が来室して来られた。

「今週末に学会がある。その研究班の班長で発表およびコメンテーターをしなければならない。公務が忙しくて何もできていない。どうしようかと知人に相談したら京大の福井さんに相談しなさいと言われたから来たのです。助けてほしい！」とのことである。

まず、今回の学会のメインテーマは何か、ご自分の担当の班がしようとしているテーマは何か伺った。そしてメインテーマ、研究班のテーマ関連のキーワードで先生が思いつかれるものすべてを伺い、メモをした。そのキーワード「スクールカウンセリング」「学校 臨床心理士」「いじめ」「不登校」などは最近、心理学関係で取り上げられているテーマであるとのことであった。

資料は結構あるはずだ。それぞれのキーワードで雑誌文献を調べるために各種データベースを用いて調べあげ、できたその情報をかたっぱしからどンドンお見せし、必要な資料に印をつけて頂いた。その印のついた資料の所在を調べあげ、簡易雑誌論文文献リストを作成した。

図書については、それぞれのテーマのキーワードと先ほど調べた雑誌論文文献リストでこの教員が印を付された著者の図書資料を京大 OPAC と本務校の OPAC で所蔵を調べあげ、簡易図書文献リストを作成した。また、同じくそれぞれの資料の所在を京都市の公共図書館と先生のお住まいの公共図書館で調べ、文献リストを作成した。このあと、京都大学での資料収集について説明した。雑誌論文は急ぎコピーし、教育学部の図書は教育学部の卒業生には貸出が出来ることに感激して帰っていかれた。帰られた後、調べ残しがないか確認し、またご連絡、いろいろと相談にのらせて頂き、このレファレンスは終了した。

第四に大学院の学生に対する存在意義である。文部科学省の方針、大学院重点化により修士論文はもとより、博士論文の執筆も以前より増えてきていた。社会人入学者も増え、論文構想の「段取り」への図書館司書としての役割の重要性を日々感じるようになってきていた。

京都大学教育学研究科において大学院生が急増した。彼らは大学を卒業して社会人になり、また志を持って大学院に入学してくる。学位を取得するために単位をとり、論文を執筆するのは、しばらく研究という場を離れた人にとってかなりハードルの高いものである。単位はなんとかかなるが、仕事を持ちながら、大学院で論文を書く、修士論文を2年、博士論文を3年で書くのはなまなかなものではない。

ある時、カウンターに臨床実践指導者養成コース大学院生が来室してきた。「福井さん、論文、書くのって疲れますよね。全然進まないのです。仕事もあるし、同僚にも気を遣うし、3年で書きあげたいし、焦ってくるのです。」と言ってため息がもれた。京都大学は、自学自習の学風なので、伸びやかで健やかな雰囲気漂っている。だが、それも善し悪しで、悪く言えば放ったらかしである。

この臨床実践指導者養成コース大学院生とは、修士号をもち、臨床心理士の有資格者であり、博士号をとるために、教育学研究科博士後期課程に編入学した人たちのことをいう。

ゼミにきちんと出席し、教員との学問的關係も良好で、論文についての話もしていると思われるのだが、どうも論文の進み具合がよくないようである。教員も社会人である、この大学院生には手取り足取り教えないようである。会話は続き、「先生もお忙しそうですし、書いたものを持っていつて、それからのご指導になるのですがね・・・」専門知識を身につけこの分野で自信がある大学院

生、それも学会報告や雑誌論文も投稿しているのに、博士論文作成という土俵にのぼれていないようである。

私が少し乱暴な提案をした。「これから、お話すること、乱暴で司書である私が申し上げるのは、如何かと。そう、福井流とでも申し上げておきましょう。」こんな私の話に身を乗り出して、「どんな方法ですか」と。

「今までにあなたが書かれた論文をパソコンやUSBフラッシュメモリーから打ち出して、冊子体も含めたものを、すべて、重複していても構わないので、用意してください。それをお家のどこか広い場所で端から並べてみましょう。そのあと、同じような内容の論文をまとめて、グループ分けしてまた並び替えます。次にそれらに番号をつけ、出典がどこから打ち出したかを書いていきます。次に、グループ分けした固まり、これを2章に、このグループを3章というように、内容を精査して、また並び替えます。まだ残っているものがあれば4章もいけるかもしれません。これで、2章、3章、4章が不完全ですが、出来上がりました。そして、次はそれぞれの章にしようとしている文章をしっかりと読み直して、関連性をも考え、手を加え作り変えます。

このように、自分が昔書いたもの、途中まで書いたものなど、残っている自分の作品をうまくリメイクして、先生に出されたら如何でしょうか」と。「お話してよかった。そうしてみますね。」それからは、文献収集も意欲的になり来室の回数がかなり増えた。論文の進捗状況も私に話しながら「京都大学に論文を書きに来て本当に良かったわ」と語っていた。

そして2年後、爽やかな笑顔とともに出来上がった博士論文を見せて来て下さったのである。

もうひとりの利用者を紹介したい。1999年から

教育学研究科修士課程に社会人対象の専修コースが設けられた。この利用者は、現在、現職の高校の英語教員で、修士の学位を取得できれば、教員免許の専修免許状が得られるのである。専修コースの大学院生は、各研究系のゼミに属さないで指導教員から直接指導を受け、専修コースというゼミに属する。研究室も専修コースの大学院生だけで、博士後期課程の大学院生などとの縦の関係が築けない。さらに社会人ということで授業にだけ出席して研究室に立ち寄らない場合もある。こうなると人間関係も希薄になる。そんな環境下で、大学を卒業してしばらく間があいた大学院生が2年で単位と論文というのはかなり大変である。

いざ論文を書き始めようとするともったく手がかからない。どう調べどう書いていいかが分からない。教員に相談するにも、基になる原稿を持参する必要がある。そんな悩みを指導教員には打ち明けられない。テーマさえあやふやな場合がある。総じて、構想するテーマが大きすぎて、現実に論文にするには困難な例が多い。あるいは、個別のデータはあっても、論理を積み上げていく訓練が未熟なため、つまづくようである。

困り果てたこの大学院生が図書室のカウンターに相談にきた。「小学校に英語教育を導入すると文部科学省が決めました。そのようなことをテーマにして修士論文を書こうと思いますが、何から始めたらいいか教えて欲しいのです。」彼女が私に質問しようと思ったのは、修士課程専修コース科目「専修コース共通演習 A」で教員がリレー式で講義を展開していた内容のうち「研究ベースとなる文献・資料検索方法の獲得」の部分を担当していたからでもある。かなり、困っているようで、どう励ましたらいいか、言葉を探しながらゆっくりと話し始めた。

「大丈夫。あなたは先生ですから、学生と違っ

た経験があることは大変な強みです。いい論文が書けると思いますよ。」まだ、利用者の緊張がとけない。少し具体的な例を紹介しながら、

「あなたが分析しようとする観点は、例えばどのようなものですか。日本の政府の政策に関することですか、現場の教師からですか、企業や社会的な面ですか、海外の初等学校と比較するつもりですか、各都道府県の教育委員会の方針なども入れるつもりですか、国立、公立、私立の小学校の格差は考察に入れますか。他にも思いつかれることがいろいろあると思います。

テーマが決まったら、次に、あなたが思いつく英語教育に関するキーワードで網羅的に文献を探してみましょう。あなたがこのテーマで分析しようと思う観点で、まず、本や雑誌論文などから先行研究を調べあげてほしいのです。」利用者の表情が入室時より明るくなり、少し、ほっとした表情になってきた。「次に文献リストを作成しましょう。あまり分野の分類を意識しすぎると進みませんから、見つけた文献が少しでも関係がありそうなところからどんどんリスト化します。」

このように利用者は、図書館司書と話し合い、質問される中で、調べ方、資料の存在、そして一番大切な自分の中にある漠然としたテーマや求めている資料がはっきりしてくる。自分が抱えている未分化の問題が何だったのかが分かり、それをどう表現したらいいか葛藤していることを、図書館司書がうまく表現してくれる場合もある。利用者自身が自分の論文のテーマについて体系だった考えにうまくとどoringき、利用者が満足できる論文執筆への手掛かりをつかむのを手伝えることも図書館司書の役目であると思う。

私は大学院になぜ行ったか。それは最新の情報を得てグレードアップした図書館司書になるためと、修士論文・博士論文を執筆する大学院生のレ

ファレンスをする上で、実際自分が論文を執筆する必要性をつくづく感じたからである。このような利用者たちへの関わりは、私が図書館司書の現場にしながら、大学院に行き、講義を受け、修士論文を執筆することで、現場では身につかないスキル、つまり理論的思考過程形成の訓練を学んだからこそできたのである。

ここで、私の大学院での生活を少し書きたい。構成員は社会人大学院生と現役大学院生が混っていた。この大学院でも「図書館は、図書館司書は大学教育を支援することが目的である」という私の考えを実際にいろいろな立場から、感じ、考えることができた。

例えば、大学・大学院、高等教育に必要な情報リテラシーとは何か、内容もさることながら、どうして、あるいは何が必要か、高等教育における情報リテラシーは何を提言していくのかである。私が大学院に通っていた時の利用教育は技術的基本的なものでしかなかった。このような環境下から、大阪市立大学での講義は新鮮で大変ためになった。図書館学の分野の開拓を知ることができたのははじめ、多領域にわたる図書館学への影響など、多面的に習得することができた。

また、同級生からもそれぞれの分野に熟知している職務実践話、学問に対する接し方を学び有益な時間を有することができた。大学院の単位はそう難しいことではなかったが、修士論文作成には大変苦労した。

私は「情報リテラシー教育と図書館の位置－図書館による情報リテラシー教育実践の批判的分析と今後の展望－」というテーマの修士論文を執筆した。概要は次のようなものである。

本研究は、第一に近年の約10数年間における、各地の大学図書館による情報リテラシー教育の実践について批判的分析を行うものである。分析材

料と視点は、(1)大学図書館の各種実践報告に見られる実践の目的を整理する、(2)対象としている学生層をカリキュラム上の位置づけから明らかにする、(3)実施体制とその内容を整理する、以上を、レビュー形式でまとめる。

第二に、情報リテラシー教育の対象者(学生)の特質や情報リテラシー保持の現状について、(1)初等・中等教育カリキュラム内容、(2)家庭等におけるブロードバンド接続等の状況などから明らかにする。第三に、真の意味での情報リテラシーとは、情報の検索にのみあるのではなく、3つのI、すなわち Information(情報)、Intelligence(知性)、Integrate(統合・発信)の総合的な能力にあることを論じる。

最後に、こうして明らかにした情報リテラシーの内容を大学における導入教育として位置づけ、そのコアカリキュラムを提示する。

この論文の中間発表のとき、他の先生方からいろいろ、足りないところを指摘頂き、もうどうして良いか分からずかなり落ち込んでいた。その時以下のようなメールを北先生から頂いた。

福井さん 永田先生から「開発カリキュラムの優位性をどう証明するのか」と問いがありました。これは調査するのではなく、必要とされる「情報リテラシー能力」を定義し、これの教育について、現在の情報検索中心のカリキュラムの問題点を明らかにし、これに欠けている「カリキュラムの穴」を指摘し、それを補うカリキュラムを提起する、が研究の「核」です。「検証」(意味がないのですが)、「評価」はこうした考察が論理的な整合性を持っているかです。

(2006年6月22日)

これを読ませていただいたとき、うれし涙がぼ

ろぼろこぼれて、文字が滲んで読めなかった。このメールは、今でも大切に保存してある。

まだ、後日談がある。締め切りが目の前に迫り、友人に添削してもらい、必死で仕上げているとき、北先生からどういう状況ですかとメールを頂いた。今、書いておりますとお返事を差し上げたら、見ますから送りなさいとのこと。お送りして、10分もたたないうちにお返事が返ってきた。これはあとから伺った話だが、教授会の最中に添削して下さっていたようだ。私は幸せな大学院生活を送ることができた。

「図書館司書を天職と思っている」と書かせて頂いた。少しおこがましいが、私らしい図書館司書としての人生を歩めたと思っている。これも、在職しながら大学院に籍をおき、研究させて頂いたから思えるようになったのである。このような力、場を授けて頂いた教授北克一先生に心より感謝申し上げる次第である。

[受理：2018年9月10日]